

令和8年9月1日

長与町議会 議長 安藤 克彦

研修報告書

長与町議会議員研修要綱第7条第2項の規定により、次のとおり公表します。

1. 研修名（主催者） 議会広報研修会（長崎県町村議会議長会）
 講演 「情報としてのことばを伝える」
 講師 文章コンサルティングファーム未来交創代表取締役 前田 安正 氏
2. 研 修 日 時 令和8年8月5日（水）13時15分～16時15分
3. 研 修 場 所 長崎県市町村会館（長崎市）
4. 研 修 目 的 議員の資質向上及び議会の活性化に資するため
5. 所 見 （記載は議席番号順）

【堀 真 議員】

今回の研修では、議会広報における「伝わる文章」の書き方や、AIを活用した情報発信について学びました。

特に印象に残ったのが、「説明」と「描写」の違いです。例えば、友人に旅行先を紹介するとき、「この町は観光地です」と説明するだけでは、その場所の魅力はなかなか伝わりません。しかし、「駅を降りると目の前に海が広がり、潮の香りがする」と伝えれば、実際にその場所にいるようなイメージが浮かびます。このように、事実を伝えるだけでなく、情景や体験を伝えることで、読み手の「行ってみたい」「見てみたい」という気持ちにつながることを学びました。

また、生成 AI は文章作成の便利な道具である一方、誤った情報を作ることもあるため、内容を確認し、最後は人が責任を持って発信することが重要だと学びました。

今回の研修を通して、議会広報は「何を伝えるか」だけでなく、「どう伝えるか」が大切だと感じました。今後は、AI も上手に活用しながら、自分たちが実際に見たり感じたりしたことを言葉にして、町民に「ちょっと読んでみよう」と思ってもらえる広報づくりに取り組んでいきたいと思います。

【岡田 義晴 議員】

本研修会は、「情報としての言葉を伝える」と題してコンサルティングファーム未来交創代表取締役 前田安正氏を講師に迎え、6部構成で約3時間の講演であった。第1部の「文章に

おける思考と感情とは」では、説明で思考を伝える重要性を強調され、説明するとはどういうことか、思考するとはどういうことかを、具体的にお教授頂いた。また、描写で感情を伝える重要性も強調された。描写で体験を伝える具体例を分かりやすく教えて頂いた。氏が特に強調された「伝える」は、情報を発信する側の立場であり、「伝わる」は、情報を聞く側の立場であるとの指摘には、改めではっと気付かされた。確かに私たちは、あれもこれも伝えたいという思いから相手の立場に立って情報発信をしているのかの思いが足りないのではないかと気付かされた。私たち議会広報広聴常任委員会の委員は、このことに思いを致すべきと感じた次第である。

第2部の「文章と文書の違いを知る」、第3部の「メディアと情報」、第4部の「文章と文書の構成」、第5部「紙面構成の原則」までは、議会だよりを作る上での重要な注意点を数多く、具体例を示しながら説明して頂き、大いに勉強になった。

第6部は、「広報誌クリニック」で本町はじめ、時津町、東彼杵町、川棚町、波佐見町、小値賀町、佐々町、新上五島町の8町の議会だよりのクリニックをじっくり時間をかけてページごとに問題点を指摘して頂いた。紙面構成、彩り、写真の配置など、自分たちでは気付かない点に大いにメスを入れて頂き、私たちもまた、それぞれの町の広報担当者も広報誌の改善に大いに役立つ指摘を頂いた。

この講演、とりわけ広報誌のクリニックで気付かされたことは、広報誌づくりに大変有意義なことであり、早速、次の広報誌づくりに取り入れ、町民皆様に手に取ってもらえる広報誌にしていきたい。

【八木 亮三 議員】

朝日新聞で長年校閲を担当された前田氏による、議会だよりの作成に資する文章・編集の技術の講演でした。

見出しの付け方や文章の構成の仕方などは、これまでも受けた広報研修と大きく変わらない方法論でしたが、研修を受けてもつい「～について」や単なる議案名・事業名のような「読者を惹きつける」見出しを書けていないこともあるので、繰り返し受けることも重要だと思いました。

しかし、よく言われる通り、中高生でも読んで理解できるような紙面が望ましいとはいえ、あまりにも「こんな見出しでは続きを読まない」という言い方がされるのは、逆に「議会だより」を読む読者の識字力や理解力を低く見過ぎているように感じる部分もあり、議案名や条列名が最も端的に内容が伝わり関心を引く場合もあるので、あまり過剰な見出しにならないように気をつけていく必要もありそうです。

余白についても必要性が説かれていましたが、文字を詰め込み過ぎないのはいいいとしても、ページ数だけ増やして紙面がスカスカにならないようにする、こちらもバランスが大事だと思います。

今回の研修は後半が参加8町の議会だよりのクリニックでしたが、クリニックで本町議会だより（197号）について指摘された点を含め、すぐに反映すべき・反映できる改善点としては「主な質疑」の「Q」「A」に続く文章の配列と、一般質問の扉ページで議員名をメインにすることが挙げられますので、次回協議したいと思います。

なお、他7町議会と比較して、本町の議会だよりは「一般質問の文字数・写真数を定めてい

ることによる公平性」については優れており、今後も堅持すべき姿勢と思います。

研修後に新上五島町議会の広報委員の方々と個人的に少しお話をしましたが、新上五島町の議会だよりの表紙写真は公募をしているもののほとんど応募はなく、ほぼ毎回議員が持ち回りで撮影しているのが実情のようで、先日視察した春日市議会のように公募もいいかと考えていましたが、現実にはなかなか簡単ではないようでした。

【松林 敏 議員】

前半の講義では、「意味を伝える説明ではなく、感情を動かす描写を意識すること」「文書ではなく文章を書くこと」が重要であるとの説明がありました。講師は元新聞記者でしたが、新聞記事も事実を説明するだけでなく、描写を加えることで読み手の感情を動かすことを意識しているという話は印象的でした。私自身は理系的な発想が強く、説明中心の文章になりがちですが、今後は説明だけで終わらない文章づくりを意識したいと思います。また、このような表現力は他人が一方向的に校正して身につくものではなく、委員一人ひとりが高い意識を持つことが重要であると感じました。

さらに、文章を「結論」「理由」「根拠」の3つの要素で構成することの有効性についても説明がありました。文章を要素ごとに整理し、伝える順序を整えることで、読み手に伝わりやすい記事になることを学びました。

後半の紙面クリニックでは、特に見出しとリードの重要性について繰り返し指摘がありました。見出しは本文の内容を端的に表現し、リードは内容を要約して本文へと誘導する役割を果たします。委員会名などの定型的な情報は目立たない位置に配置し、見出しは読者の関心を引きくものにするという考え方は、今後の編集に生かすべき点だと感じました。

また、「中学3年生から高校2年生程度の読者にも理解できる内容を意識すること」が重要であるとの指摘もありました。専門用語や難しい表現はできるだけ避け、必要な場合は注釈を付けるなどの工夫が必要だと感じました。

今回の研修を通じて、難しい内容でも興味のある人だけが読むという考え方ではなく、議会に関心のない人にも興味を持って読んでもらえる紙面づくりが重要であることを再認識しました。そのためには、委員がそれぞれ担当記事を持ち寄って全員で校正するだけでなく、委員長・副委員長が全体の統一感や完成度を意識して最終的な校正を行う体制も必要ではないかと考えます。

【西田 健 議員】

1. 最初に以下項目について説明があり、基本的な考え方の勉強となった。

基本情報の説明

- 文章における思考と感情
- 文章と文書の違いを知る
- メディアと情報について

情報の発信

- 文書と文章の構成
- 紙面編集の原則

2. 各町の議会だよりの構成について指導があった。

長与町 みんなの議会3月号について以下コメントがあった。

- (1)表紙について何をトップの見出しにするか検討すること
 - (2)紙面構成を整理すること
 - (3)2、3ページの繋がりを意識すること。
 - (4)誌面構成を整理すること。
 - (5)見出しやリードを入れる⇒描写する
- 今後の誌面づくりについて参考となった。

【浦川 圭一 議員】

本町令和8年3月号の議会だよりについて、編集の仕方などについて指導いただいた。今後の編集作業の参考になればと思った。

2～3ページの見出しと記事について、見出しが常任委員会の内容で、記事は議会で決定した内容が書いてあり、紙面構成を整理し、ページの繋がりを意識したほうが良いとの指摘があった、また3ページ目の討論の記事についても委員会での討論か議会でのものかわかりづらいとのことであった。

毎号掲載される一般質問の記事については、冒頭の「8人が問う」との見出しについて必要な要素なのかとの疑問を持たれた、また各議員の記事については、バランスが取れた読みやすい紙面構成であるとの評価であった。

他にも、記事について細かい指摘もあったので今後の議会だより編集の参考にし、委員全員協議のもと、業務に取り組みたいと思ったところです。

【安部 都 議員】

今回の議会広報の研修会は、「情報として言葉を伝える」という広報作成時の人とAIの相違から始まり、「説明」だけでは（人は動かない）気持ちは伝わらない。文章手法の「起承転結」を学んだ。感情は説明ではなく、描写で伝えるという。描写を加えることで、より分かりやすく想像出来る。説明（意味を伝える）から思考（論理で届ける）を伝える（思考に訴える文章）を書くこと。話し手及び書き手の思考や感情がほぼ表現されている。自分にしか書けないことを、誰にでも分かる文章で書くこと。価値・理由・根拠に編集することで、読者が分かりやすくなる。又、文章設計の原則として、感情で入口を開く→思考で信頼を作る→余白で読者に余地を残すことが原則だという。AIで作った文章は、正しさより、自然な日本語を優先し、そのため誤りが混入するリスクが高い。揺らぎや温度がないという。感情が共有出来ない起承転結の「転」がない。と言われた。もっともだと思ふし、AIを使用する際の最低限に抑え、注意が必要だと思う。タイトルを短く、文章に統一感があり、レイアウトも統一されている賞を受賞した自治体のケースも紹介された。誰に紙面を届けるか意識すること。伝えるではなく、「伝わる文章」中学生でも読める文面を作成すること。本町の議会だよりの評価を頂いた。常任委員会のタイトルではなく、文章の中身をタイトル（器の中身）を持っていくことの重要性を指摘された。一般質問の紙面構成については、見やすさを評価されたのは良かったが、見出しには、キーワードを入れ、読みやすくすることなど、今後の課題を指摘され改善すべき次に繋がる研修会でした。次に生かして参ります。